

長野県 あんしん未来創造 フォーラム

ダイジェスト

令和3年(2021年) 3月5日(金) 開催

於 長野上水内教育会館 大会議室 + オンライン



生活課題の解決や地域福祉の推進にかかわるあらゆる団体の参画により、長野県地域福祉活動計画(信州ふっころプラン)が策定され、「ともに生きる ともに創る 地域共生・信州」の実現に向け、発信と実践を深化させ、あんしん未来の創造を計画化しました。この計画を具体化していくため、分野や立場を越えて皆がつながり、一人ひとりが生き生きと地域のなかで暮らせるような仕組みを長野県内につくり、あらゆる組織や専門職、住民などを巻き込みながら、新たなあんしん未来の創造を目指すため、本フォーラムを開催しました。

CONTENTS

02 イン트로ダクション

あんしん未来の創造にむけて
～信州ふっころプランより～

長峰 夏樹 長野県社会福祉協議会

03 オープニングトーク

信州ふっころプランの推進と
あんしん未来創造センターへの期待

上野谷 加代子 氏 同志社大学 名誉教授

05 あんしん未来創造提言Ⅰ

フューチャー・デザインで考える
あんしん未来の創造

井上 信宏 氏 信州大学経済学部 教授

09 あんしん未来創造提言Ⅱ

『ひとりの想い』を大切にする福祉実践の
展開と人間の新しい価値観の創造

大原 裕介 氏 社会福祉法人ゆうゆう 理事長

12 テーマセッション

あんしん未来を展望する

上野谷 加代子 氏 * 井上 信宏 氏 * 大原 裕介 氏

16 長野県あんしん未来創造センターの 設置にむけて



地域共生応援大使
ふっころ

あんしん未来の創造にむけて ～信州ふっころプランより～

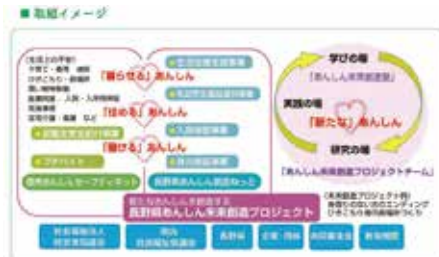
長峰 夏樹

長野県社会福祉協議会 総務企画部長
まちづくりボランティアセンター所長



迅速に多様な資源開発を実践中。
今後、みらいに向けて「しっかり熟成」機能が必要

- ◆身寄り問題 【入居保証・身元保証事業】
- ◆緊急就労 【緊急就労支援事業】
- ◆コロナ移住チャレンジ 【かりぐらしスタートプロジェクト】
- ◆ICTを活用した災害時の要援護者 【災害福祉カンタンマップ】
- ◆福祉から他分野（農林、環境、産業、交通）へアプローチ 【農福連携】



あんしん
未来創造
センターを！

信州ふっころプラン策定の思い

信州ふっころプランとあんしん未来創造センターを目指す私たちの思いをご説明します。長野県社会福祉協議会では、平成26年度から生活就労支援センターまいさばを運営し、相談員の複雑なニーズに対応する資源開発に一つ一つ取り組んできた経過があります。さらに「新しい安心」を創造し続ける機能をしっかりと確立したいと願い策定したのが、信州ふっころプランです。

参画団体へのヒアリングを重ね、具体的な取組として、「ともに生きる」を発信する、「ともにつくる」を実践する、「あんしん未来」を創造するという3つの柱と、8つの実践目標を立案しました。

災害支援で多機関協働を実践

上野谷先生にもご意見をいただきながらプランがまとまりかけた頃に、令和元年東日本台風災害が起きました。千曲川の堤防が決壊する甚大な被害の中、全国から1日に数千人というボランティアの方々が駆けつけて素晴らしい助け合いの活動が展開されました。

一方で、災害支援の現場ではふっころプランが目標とする多機関協働が様々な形で実践されました。

その1つがONE NAGANOというスローガンのもと、官民協働で災害廃棄物

の片付けプロジェクトが生み出されたことです。軽トラボランティア隊をはじめ、官民がそれぞれ自分の持ち場を一步步はみ出して実現した協働です。

2つ目は農業ボランティアの活動です。農協、生協、NPOの関係者も含めた協働のプロジェクトとして立ち上がりました。ここから障害者就労支援事業所が農地の災害ごみの片付けを長野市から委託した「農福片付けプロジェクト」も実現しました。

ふっころプランの取りまとめを通して「住民のエンパワメント」「縦割りを超えた連携」「まちづくりの視点」が災害支援の現場で実現できたのではないかと考えています。

あんしん未来創造センター 設立に向けて

信州ふっころプランは2020年7月にスタートし、今のコロナ禍でも具体的な協働の取組を一步一步進めています。そして、8番目のチャレンジングな目標として「あんしん未来創造センターを目指して」を掲げています。

あんしん未来創造センターの目指すところは、社会福祉法人の公益事業を核として、地域の生活課題を官民協働で解決するプラットフォームづくりの機能を

しっかりと確立することです。2022年4月開設に向け、準備を進めています。

新しい創造事業を迅速に展開

令和2年度、コロナ禍の中、新しい支援の仕組みづくりとして取り組み始めたのが緊急就労支援事業です。激増した特例貸付の相談者に対して、令和2年5月に雇用型の新しい支援として提案したものです。福祉現場の声を受け、これまで培ってきた瞬発力を活かし、迅速に事業化しました。

特徴はまいさばや福祉人材センターの相談機関に登録し、そのプロセスを通して助成金を活用するという制度です。2月末で174名の方がこの事業で就労につながっています。

このほかプチバイト事業、入居保証・身元保証事業、かりぐらしスタートプロジェクト、災害福祉カンタンマップなど、現在いくつかのプロジェクトが進んでいます。

これらの未来に向けた創造事業をしっかりと熟成させ広げていくために、あんしん未来創造センターを立ち上げますので、ぜひ皆さんの参画をお願いいたします。

信州ふっころプランの推進と あんしん未来創造センターへの期待

上野谷 加代子 氏
同志社大学 名誉教授



略歴：大阪市立大学家政学部社会福祉学科、同大学院家政学研究科社会福祉学専攻修了。研究テーマは、地域を基盤としたソーシャルワークの展開方法(論)と教育方法。日本地域福祉学会会長、日本福祉教育・ボランティア学習学会会長、ソーシャルワーク教育学校連盟副会長、厚労省社会保障審議会福祉部会委員等を歴任。現在「広げようボランティアの輪」連絡会議会長、中央共同募金会理事、「赤い羽根基金」運営委員会委員長、社会福祉振興・試験センター理事、大阪市社会福祉審議会委員など務め、全国各地の地域福祉計画策定委員会委員長等で活躍。

信州ふっころプランの目的を 一人一人の言葉で確認してほしい

信州ふっころプランを実践するにあたり、ここでもう一度、何のためにプランを立てるかを皆さんの中で見つめ直していただきたいと思います。目標を定めてその実現に向けて、何をするのか、誰が誰とどこでどのように展開していくのか、手段や方法ですね。そういう展開をしていくことを記したものです。

このプランは、参画団体、関係機関の方々へのアンケート調査を行い、対話を重ねて苦労されてまとめ上げたものです。だからこそ実践も自分たちでやっていく。全国各地の自治体で見られるように委員だけが選ばれて、どなたが選ばれてるかも皆さん実践者は知らない。この計画ができましたから、これやったださいとパラシュートで上から降ってくるようなプランが結構あるわけです。やはりプランにはリアリティーがないと、自らに引き寄せて実践する気力が湧いてきません。

その意味でこのプランは、何のために誰がするかを明確にする。行政がするわけではない。私が、私たちがと、主語をはっきりさせる。“with”は、あなたと、あなた方と、専門職と、などいろいろ出てきます。“誰”というと仲間です。連携相手。“どこで”は生活圏域を大事にします。

“どのように”は参画と協働で推進します。そんな生活課題を解決し夢に向かって歩くエネルギーが得られるようなプランとするため私はこれを皆さん方の一人一人の言葉で表現していただきたいのです。

例えば、家族といっても曖昧な概念ですから、それは夫と、おばあちゃんと、息子と一緒に、こういう課題に向けて解決する方策を立てるんだとはっきり言うことが大切です。

「社会福祉は幸せ探し・幸せづくり」と私はよく言いますが、誰が誰とどこで、幸せ探しと幸せづくりをするのかにこだわるのが地域福祉です。夫と、近隣の人たちと、専門職と、知事と議員さんと、商店街と、といったように対象を明確にする。

そういう意味でこのふっころプランはその手段であり、戦略であり、誰が誰とどこではこだわっています。

学んだことを活用する 知識は「使ってなんぼ」

それを上手く生かすかどうかは一人一人の力量にかかっています。そのためにも学びが大切です。

その学びは単なる知識としての技法だけではなく、それを活用してこそ意味があります。知識は「使ってなんぼ」です。

理念と知識と方法によって課題を解決する。それが学んだことの証拠になるのです。

あんしん未来創造センターは ふっころプラン展開の舞台です

あんしん未来創造センターはふっころプランの展開の舞台です。初めからセンターがあるわけではなく、プロセスです。そこで演じるいろんな人が組み合わさって99を作っていく。企業と住民、介護事業者と医療事業者、または違う人たちかもしれない。そして専門的な技術や知恵だけでなく、それまでの経験値や、人間に初めから備わっている生きる力があります。これは長野では台風災害の支援で証明しました。蓄積してその力とその知識を創出していく場です。

そして皆で話し合うこと。対話や、交流が必要です。

自己変革と他者変革、 社会変革の場に

そこから自分が成熟するための自己覚知と、自己省察(リフレクション)が必要です。自分の足りないところ、自分の悪いところはあまり気づきたくないことですが、それも含め自分を見つめ直すことでもっと自分が変わっていきます。

自分が変われば、身のまわりの人が変



長野県
地域福祉
支援計画
2019-22



長野県
地域福祉
活動計画
2022-22

関係団体の
協働活動
アクション
プラン



信州ふっころプランが目指す目標を、何のために（目的）だれが（主体）だれと（仲間、連携相手）どこで（圏域）どのように（方策、技法、参画と協働）推進するのか？を皆さんがもう一度それぞれの言葉で確認しましょう。

わかります。家族や地域の人、他者を変革する。いきなり社会は変革できません。心を込めているいろんなことをやってる人がいたら、心を動かされるものです。

そういう意味では社会変革はできると私は信じています。どうして信じられるのか。それは私の社会実験、経験から実証されているからです。

「^{えにし}滋賀の縁創造実践センター」の取り組み

私は滋賀県社会福祉協議会の「滋賀の縁創造実践センター」の始まりから今日まで6年間から関わっています。

この定款の中に「法人の呼称は滋賀の縁創造実践センターとする」とあります。これは全国社会福祉協議会でも色々話題になりました。社会福祉協議会の名前を変えたいいけないと。しかし呼称を定款に入れた。制度のはざまにおける協働実践から始まっているいろんなことを自分たちに縛りを入れています。これは決意であり、覚悟です。そうしながら緩やかな連携を作っていくのです。

ミッションだけでは私たちは動けません。そして私たちのミッションや信念を応援してくれる仲間の理解がなければ元気になれません。これは仲間が応援し

てくれるような作り方をしているわけです。

一番元気にしてくれたのは、気づきシートの作成です。見て見ぬふりをしがちな社会で、一人の気づきから支援の質を変えていきました。

仕事での悩みや傷ついたりしたことなどをあげてもらおうのですが、一番多かったのは保育士さんです。一例として、ある園児の送り迎えに来たおばあちゃんが、片足に下駄、片足はスリッパというちぐはぐな格好で来るようになったので、保育士はおかしいなと思い、もしかしたら認知症の始まりではないかと気づくんです。

その気づきシートを老人ホームの指導員が読んで、「それだったら地域で何とかできます」と言って、個人情報に留意して知恵を働かせ、地域包括支援センターにもつなげました。

一言でつなげると言っても、その地域ならではのお節介の仕方もあれば、スマートに気づきシートを上げることによって解決する場合もあります。それはいろいろ試してみて、失敗したら次を実行すればいい。重層的とは公的なサービスや制度だけでなく、暮らしの中の小さいことも重層的にしながら一つ一つ解決をす

ることも必要です。

学びを通して自分を俯瞰し 助けられ上手になろう

また「滋賀の縁創造実践センター」では、この10月に縁アカデミーが開学します。私は学長を勤めます。「今」をとらえて、福祉人が横串で繋がる。受講者も講師陣も事務局も、いっしょに学び合いながら、学びをカタチにしていって学びの場です。

学びを自分のものにするには、人によってそれぞれです。小・中学校の学びは義務教育的に必要な知識を詰め込んでいきます。けれども人や地域の課題を解決するにはそれ以外に別の技法や学びが必要です。

今回のフォーラムもそういう意味では今持っている力を違った観点から見つめ直し、俯瞰する機会と捉えていただきたいと思います。地上から宇宙へちょっと飛んでください。それは事務職の方も同じです。

そうすると自分の足りない点や、自分と周りの人との関係性が見えてきます。リフレッシュをしたらいい。私もそうしますが、他の人の力を借りて助けられ上手になりましょう。助けてばかりは疲れます。

夢の実現のために

重要なことは、ふっころプランはこうあってほしいという夢です。夢を実現していくためには、私たちが自分の力を出し切り、他の人の力を借りて、ごちゃごちゃと混ぜて、新しいものを作っていくことです。ふっころプランに参画された方々はいろんな意見を持ってらっしゃいます。それをとにかく一緒に語り合って作っていく。いろんな意見を受け入れる度量も必要です。

ふっころプランの実現に向けて、皆さん、これからも一緒に頑張っていきたいです。

フューチャー・デザインで考える あんしん未来の創造

井上 信宏 氏
信州大学経済学部 教授



略歴：1998 年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。同年信州大学経済学部講師、2001 年助教授を経て、2011 年教授。専門は社会政策（社会保障・ヘルスケア政策）。現在の研究テーマは、コミュニティケアを可能とする地域づくり。“フューチャー・デザイン”を取り入れた未来志向の政策科学の研究。

フューチャー・デザインとは何か？

あんしん未来の創造にあたり、今日は皆さんにフューチャー・デザインの話をさせて下さい。

最近では福祉の分野でも必ず出てくるバックカスティングという考え方があります。望ましい未来の姿を考えて、今のような計画を立てていけば良いのかを考えるのが、バックカスティングの考え方です。政策立案の具体的な手法として取り入れられています。

一方でフォークアスティングの考え方があります。現状を分析してどんなことができるかを考え改善策を積み上げていく考え方です。基本的には今までの私たちの考え方で、現在を延長させる中で未来を想像するので、今と同じような価値観、今と同じものの見方による未来像となります。

最近はバックカスティングの手法で未来への道すじを考えるようになっていきます。この問題点は、未来の姿が本当に望ましい姿と言えるのか、その判断が難しいことです。場合によると未来に対する今の私たちの価値観の押し付けになるかもしれないからです。

今の私たちの考えが強固なのであれば、未来を考える時に未来人を呼んでく

るのがいいのではないかと私たちは本気で考えました。

国内はもとより欧米にいたるまで数多くの研究者が参画して、フューチャー・デザインの考え方で社会を考えようという声がどんどん高まっています。現在は提唱者の西條辰義先生のアイデアを各地で具体化をしようとプロジェクトが進められています。

人生の先輩こそ未来人になれる

フューチャー・デザインの手法は、未来に関わる仕組みや政策を考える時に、ワークショップにより未来人になりきって考えることが一番のポイントになります。福祉専門職の養成時に使うロールプレイの手法に似ているかもしれません。

今の私たちがどうすれば未来人になれるかを研究中ですが、現在わかっていることの一つは、未来人に一番近いのは経験を重ねた人生の先輩であるということです。従来のバックキャストの考え方ならば未来のことは若い人がふさわしいと考えがちです。しかし、それは私たちの思い込みだったようです。若者よりも高齢者の方が未来人になれるのです。

従来の社会科学との違い

ここから西條辰義先生の論文^{*}を元にしながら、フューチャーデザインの考え方を紹介しましょう。従来の社会科学の考え方は今の社会を作ってきた大切な二つの仕組みに影響を受けています。

一つは市場経済です。市場経済を横において今の社会を成り立たせることはできません。市場経済のことを私たちは資本制、または資本システムと呼んでいます。

もう一つは民主制です。全員で何かを考えて決定するには投票や多数決で行う。国民一人一人が主権者としてものを考え、あるべき社会を考えるために一票を投じる。

ここで考えたいのは、今の私たちの考え方を決定づけている市場経済と民主主義を新しい仕組みに作り変えることができないだろうか、今までの考え方を変革することができれば未来の姿は変わるのではないかとということです。これがフューチャー・デザインの考え方のゴールにあたります。

持続可能性が問われる社会問題

近年、これからの社会は SDGs のように持続可能性を考えなければいけないと言われています。地球温暖化の

^{*}バックカスティング(Backcasting) 理想的な未来の姿から逆算し、現在取り組むべき施策を考える思考法。環境保護の分野で生まれた考え方と言われる。

^{*}フォークアスティング(Forecasting) 現状や過去のデータをもとに考える、現在を起点に未来を予測する思考法。

^{*}フューチャー・デザイン研究プロジェクト 日本における実験経済学を牽引してきた西條辰義氏(高知工科大学)が提唱する「フューチャー・デザイン」の手法を科学的に検証可能なものに発展させるとともに、それを社会実装することを目的として研究を続けている。信州大学経済学部にはフューチャー・デザイン研究センターが設置されており、井上信宏氏がメンバーの一人である。

^{*}西條辰義先生の論文 西條辰義[2020]「フューチャー・デザイン：持続可能な自然と社会を将来世代に残すために」『ランドスケープ研究』84-1

問題や少子化を含めた未来の人口の問題。直近では医療・介護、福祉といった社会保障に関わる問題も持続可能性が議論されています。

しかし今の社会システムの考え方の中では、残念ながらSDGsが掲げる目標はいつまでたっても達成できないかもしれません。私たちが現代世代として考えてしまうからです。これが今一番大きな問題です。

私たちは未来を考えるときでさえ今の自分の利益を優先して考えがちです。目の前の利益を減らしてまで未来のことを考えるのは一番苦手なことなのです。その意味では地球温暖化問題と社会保障の問題は根っこが同じです。

同時に私たちは、この豊かさの足元にwell-beingのコミュニティの核があることも知っています。この相矛盾したものをどうやって調整するか、改めてフューチャー・デザインで考えていく必要があるのです。

現在の社会システムで 目を背けてきた主体

今の私たちの暮らしを支えている社会システムは、今ここで、自ら声を出す強い個人を主体にできあがっています。そうなるように教育も組織されている。投票行動もそうです。

一方、現在の社会システムが目を背けてきた主体が存在します。障がいを持つ人や子どもたち、そして未だ生まれていない将来世代です。ここにいなから議論の場に参画できない(障がい者や子どもはさることながら)、私たちは将来世代も含めて今直面している課題を考えなければならない時代を生きています。それこそが持続可能な社会を考える上で極めて大切な視座ではないでしょうか。

世界はどうして後戻りできない 状況に陥ってしまったのか？

私たちが真剣に未来に目を向けるようになったのは、地球温暖化でした。

歴史を紐解くと、今私たちが直面している深刻な課題が見えてきます。

その一つが、グレート・アクセラレーション^{*}です。GDP、人口、エネルギー消費量の増加など私たちの暮らしが一挙に変わった大きな転換点が1950年代で、地球の環境システムが大きく変わりました。何よりも温暖化の元凶とされる二酸化炭素の濃度が1950年代から急激に上昇し、同じくメタンガスの濃度もどんどん高くなってきています。

私たちの暮らしはそのときから20年余りで豊かな生活になりました。問題は今の暮らしを続けていたら未来はどうなるかということです。

実は私たちは、もう取り返しがつかない地点にいます。それを可視化したのがプラネタリー・バウンダリー^{*}です。全ての環境指標でその転換点を超えてしまったわけではありませんが、3つの指標はもはや臨界点を超えてしまって元に戻すことができないとされています。二酸化炭素の濃度、生物の絶滅率、窒素です。

カーボンバジェットという考え方があります。気候変動につながる地球上の炭素量をここまでだったら使えるという限度枠を決めてコントロールしようという考えですが、うまくコントロールできているとはいえません。

自然環境の話になるとグレタさんの演説を思い出します——あなたたちが科学に耳を傾けないのはこれまでの暮らし方を続けられる解決策しか興味がないからです。そんな答えはもうありません。あなたたち大人がまだ間に合う時に行動しなかったからです。

いずれも大切な事実ですが、こうして指摘されない限り、私たちは事実を直視せずスルーしてきませんでしたか。なぜかという私たちはそれらをスルーするようなマインドを持っているからです。

市場経済は現代世代の欲望をどうやって実現するかというしくみです。持続可能性の問題をどうしても横に置きがちなのは、この社会システムの考え方

から離れられないからです。

未来に先送りしがちな課題を私たちが自分の課題として考えるためには、今の考え方をどうやって横に置けるかなにより大切になってきます。これを皆さんと一緒に考えようというのがフューチャー・デザインです。

今の私たちに 未来を考えることができるのか？

現代は格差社会と言われています。今までの社会では、一生かかっても使いきれない金額のお金でも、儲けているのは才覚だからと考えてその人に帰属させている。それは当然のことであり、社会の正義であるから、誰も否定できないという構造になっています。そのお金を稼ぎ出した背景には、多くの人が関わる生産や流通といった経済活動が横たわっています。その結果としての利益です。しかし、それらを分かち合うしくみが脆弱だと言わざるを得ません。

今の私たちのこの社会を作ったのが民主制の仕組みです。政党、あるいは政治家に投票して、現代世代の利益を実現する社会を是とする考え方を手にしました。格差社会の向こう側には、私たちの先輩たちが連綿と受け継いできた社会システムが存在しているのです。

多くの課題を背負った今の私たちはかつての先輩たちに伝えたくありませんか——「あのときこんなふうになければよかった。もっと別の道を考えておいて欲しかった」と。そこで、そこが大切なのです。新しい社会システムを声高にいうだけでは私たちの考え方は簡単には変わらないのです。

そこには私たちの心理的な特性があるようです。「相対性」「衝動性・近視性」「社会性」「楽観性」であり、行動心理学などで明らかになっている特性です。

ヒトの心理特性を知る

一つ目の相対性は、私たちは周りの影響を受けやすいということです。周り

^{*}グレート・アクセラレーション(Great Acceleration)「大加速時代」 第二次世界大戦後の経済活動の急成長とそれに伴う環境負荷の飛躍的増大を指す。
^{*}プラネタリー・バウンダリー(Planetary Boundaries)「地球の限界」 人類の諸活動がある転換点を超えてしまい、もはや取り返しがつかない「急激かつ不可逆的な環境変化」が生じている様子を示す概念。
^{*}カーボンバジェット(Carbon Budget)「炭素予算」 人間の諸活動を起源とする気候変動による地球の気温上昇を一定のレベルに抑える場合に想定される、温室効果ガスの累積排出量(過去の排出量+現在の排出量)の上限值。
^{*}グレタ・トゥーンベリさんの演説 スウェーデンの高校生環境活動家グレタ・トゥーンベリさんによる2019年4月の英国議会でのスピーチより。

の向くほうに向いてしまいがちです。これはネガティブなことではありません。この根底に共感があるからです。

二つ目は衝動性・近視性です。一言で言えば、目の前のおいしいものを今すぐ食べたがるということです。先に取っておくよりも早く食べないと、と思ってしまう近視眼的な考え方です。

三つ目は社会性です。ここではどちらかという攻撃的な意味で、人同士が協力をして他を制圧する特性です。

四つ目が楽観性です。私たちは過去の嫌なものを忘れて今の快楽を求めているがちです。将来はどうか考えるときに、将来を楽観視するのです。いずれ科学が問題を解決してくれる。今まで私たちの暮らしが豊かになったのは科学技術の発達があったから。将来も大丈夫だろうと。その考え方自体が、私たちの今までの考え方の延長です。フォーカスティングと何ら変わらない。

そんな時には皆さん先ほどのグレッタさんの言葉を思い出してください——今の暮らし方を続けられる解決策しか興味がないからです。

今でさえ^{しっごく}桎梏を抱えているのに、未来のことなど考える余裕などないといった反論もあるかと思いますが。今の社会システムの中で未来を考えるとすると極めて難しいかもしれません。しかし私たちより以前にしっかりと未来を考える人たちがいました。そこに考えるヒントがあります。

アメリカ先住民

イロコイ族から学ぶ

この例も西條先生が好んで引かれるものです。それが北部アメリカ先住民のイロコイ連邦の人たちです。彼らは重要な意思決定の際、自分たちの今とこれからのことを考えるために7世代先、なんと300年以上先の子孫のために今の自分たちが何を選択するべきかを考えていたそうです。私は未来を慮る考え方を採用していたイロコイ連邦の人たちにできて私たちにできないはずはないと考

えたいです。

親世代から子世代への贈与

もう一つは、親が自分の食べ物を減らして子どもに与える行為がふつうにあります。親は少しお腹がすくけれども、幸せを感じます。これは大変重要だと思うのです。科学的に定義するならば「互酬」、あるいは「贈与」という行為です。たとえ今の利益が減ったとしても、将来みんなが豊かで幸福になるのなら我慢ができると思えるマインドが本来私たちの根底に存在しています。

この視点をなんとか今の私たちの暮らしの中に引き上げられないか。共感につながるこの点を、私たちはもっと考えるべきだろうと思っています。

ヒトの共感・感応能力に希望を託したい

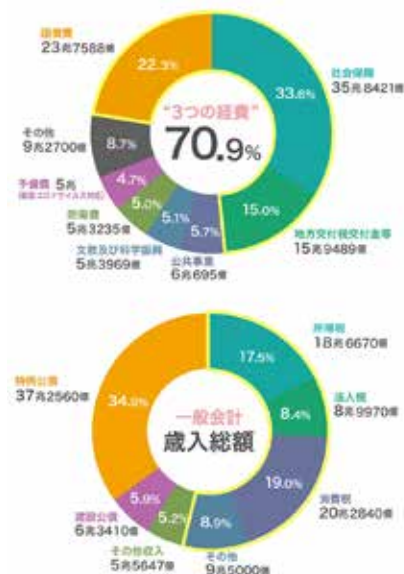
この考え方の軸となる大切なキーワードが、上野谷先生も指摘された「共感、感応能力（エンパシー）」です。何かに感応する共感力は人にしか備わっていないと言われています。この能力は遺伝的に継承されるだけではなく、生涯にわたって育てることができると心理学の実験でも明らかになっています。

ここが重要な発見なのですが、人類しか持ち得ない共感力は死ぬまで育てることができるそうです。それならば未来を考えることは私たちすべての世代の人に可能となるのです。私はここに賭けたい。

「生きづらさ」を抱えた人たちとどうやって共生するか

ここまで環境の話を中心にしてきましたが、私たちが持続可能性を考えた時、今直面してる福祉の課題も同じではないかと感じています。

あんしん未来創造の重要なテーマとして、生きづらさを抱えた人たちとの共生は大きな課題の一つです。これを考えるために、日本の社会保障の持続可能性から考えてみましょう。



2021(令和3)年度の日本の一般会計歳出と歳入

2021年度予算を報じる NHK のサイト (with コロナでどう変わる：2021 年度予算) から転載
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/yosan2021/>

日本の国家予算のどこが気になるのか？

日本の2021年度の国家予算はおよそ106兆円あまり。そのうち30%を超える35兆円が社会保障給付費に使われています。

もう一つ重要な点は106兆円の調達先です。税金が大半ですが、ここで注目をしてほしいのは特別公債、建設公債と言われる借金です。この二つを合わせた43兆円は、予算106兆円の4割近くを占めています。

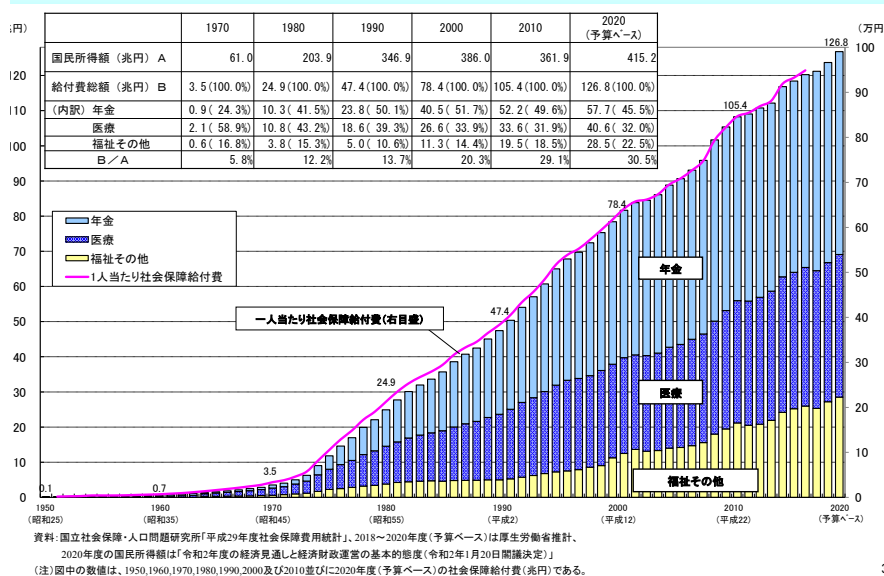
お気づきのとおり、この借金は現代世代の私たちが未来の人から前借したものです。今の私たちの豊かさや目の前の課題解決のために、将来のまだ見ぬ人からお金をむしり取ると言っても言い過ぎではないのが現状です。

現在日本の国が抱えている借金は2021年度が終わる頃には990兆円を超えるそうです。今すぐ消費税率を50%にまで引き上げて100年間続いても借金の残高は現在の60%ぐらいにしか抑えられない水準です。皆さんの家がそんな状態だったらどうしますか。

目の前のことで必要だから公債を発

*イロコイ連邦 北アメリカの先住民6つの部族からなり、18世紀から続く共和制の部族連邦。1000年も前から高度な民主制の社会を確立していたと伝えられる。

社会保険給付費の推移



社会保障給付費の推移を公開する厚生労働省のサイトで提供されている資料から転載
<https://www.mhlw.go.jp/content/000651378.pdf>

行すると政治家は考えます。つまりそれは今の私たちの豊かな暮らしの向こう側にある喫緊の課題を先送りしてるということです。

その先送りをどうやって止めるかを考えなければいけないはずなのに、今をどう乗り切るかばかりに注目しがちです。この視点の根っこにあるものがフォーカスティングです。

日本の社会保障制度は 持続可能なのか？

例えば高齢者のケアをどうするのかという課題。こうした課題は社会保障制度だけを考えている限りでは新しい解決策は出てきません。使えるツールは必ずしも社会保障だけではないからです。

考えなければいけないのは俯瞰して社会システムをどうするかを考えていくことです。バックカスティングやフォーカスティングといった今の私たちの考え方を前提にしてる限りではもはや問題解決はできない。だから私たちの視点を未来に向け、その未来の中で問題解決を図るフューチャー・デザインを提起するのです。

将来世代は今の私たちの取り組みをどのように見ているか？

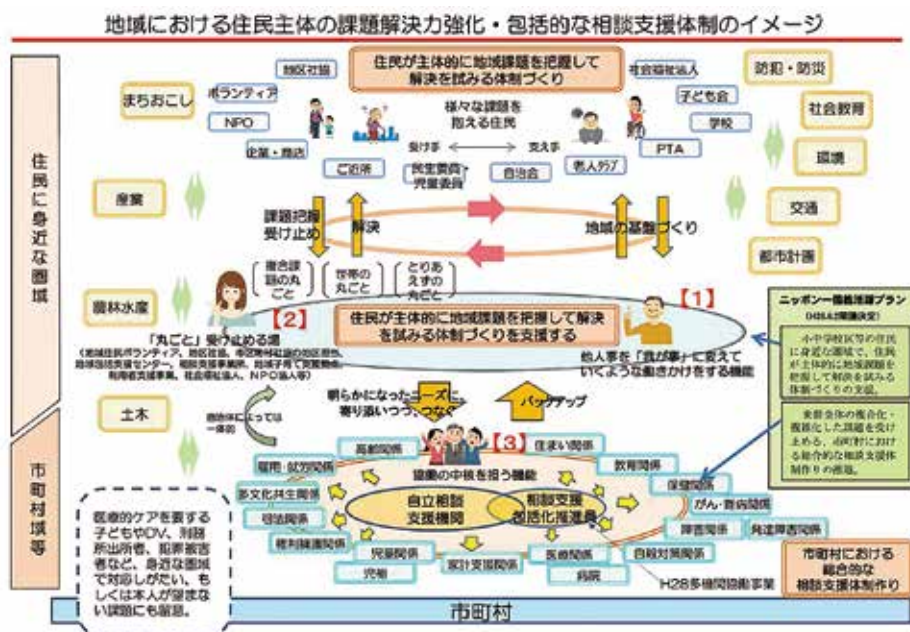
「我が事・丸ごと」から始まって「あんしん未来創造」の向こう側に、私たちは地域共生社会の実現を考えようとしています。地域共生社会やあんしん未来創造を社会実装するとき、皆さんに考えて欲しいのは、50年後の将来世

代が今の私たちの取り組みをどのように評価してくれるかということです。

地域共生社会に関わるイメージ図は言うなれば“プランA”です。でもこれとは違う“プランB”があるのではないかと。将来世代が「50年前、どうして先輩はプランAを選択してしまったのか」と指摘するかもしれない。よりよいプランBがあるのではないかと、そうした問題意識を持って、未来に持続する社会をデザインすることこそ「あんしん未来創造」のあるべき姿だと思います。

未来人が考えるプランBを想像すること——そうした想像が 私たち自身が囚われてしまっている考え方を変革し、新しい社会システムを創造する第一歩だと思います。そんな‘フューチャー’を考えることができる土壌を、皆さんと一緒に、この信州で創っていきたいと思っています。

ここにいる全員が50年後の信州に暮らす未来人です。未来の信州人に見えるあんしん未来創造の「プランB」を2021年に生きる私に教えてください。



厚生労働省『平成29 年版厚生労働白書』の図表4-2-1 を転載
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/17/backdata/02-04-02-01.html>

『ひとりの想い』を大切にする福祉実践の展開と人間の新しい価値観の創造

大原 裕介 氏

社会福祉法人ゆうゆう
理事長



略歴：平成 15 年に北海道医療大学ボランティアセンターとして設立。大学卒業後、NPO 法人当別町青少年活動センターゆうゆう 24（現在「社会福祉法人ゆうゆう」）を起業する。あらゆる住民がそれぞれの立場を超えた支え合いによって福祉の実践を構築する共生型事業や国内外のオールブリュット事業の発信、民間活力を活用した社会的事業の研究など様々な実践を創り続ける。北海道医療大学の客員教授として、福祉現場の魅力を伝え後進者を育成するほか、NPO 法人全国地域生活支援ネットワーク代表理事として様々な政策の提言にも関わる。

本日私は社会福祉法人ゆうゆうの本部がある北海道当別町からオンラインで参加しています。

当別町は札幌市の隣町で、人口は約 15,000 人です。わが町のターニングポイントは老年人口と生産年齢人口が逆転する 15 年後と予測されています。

この国の大きな課題は少子化だと思っています。こうした人口動態の中でその人らしい生き方や、まあまあ暮らしをつくっていくことに、福祉が果たしていく役割は大きいと思っています。

空き店舗を利用して大学のボランティアセンターを設立

私がゆうゆうを作るきっかけからお話します。北海道医療大学で 3 年生の後期ごろ、町の空き店舗を利用して大学のボランティアセンターを作る企画があり、友人から誘われて手伝いのつもりで参加しました。センターを中心としたフィールドワーク研究に 3 年間携わり、ここで障がいのある子どもたちをお預かりしていました。

その中で出会ったのが泰地くんというダウン症の男の子でした。お母さんからいろいろな話を伺ったとき、最もインパクトがあった言葉は、「この子に私より長生きしてもらいたくない」でした。最初は意味が分からなかったのですが、その後、「私がいなくなったら、この子の



大学生の時に会った泰地くん

世話を誰がするのか。このまちにそんな頼れる場所も人もない」と話されました。とっさに私は「もし親にそう思われていたとしたらとても悲しいです。なので私は泰地くんの味方になれるかもしれない」と答えたら、お母さんは笑ってくださいました。「初めて泰地の味方とってくれる人がいた」と。

地域に飛び出し、支援を見える化

当別町には当時、障がいのある子どもたちや障がいのある人たちが通所したり入所したりする社会資源は全くありませんでした。そこで、センターで預かることにして地域生活支援を始めました。預かることができるまで 2～3 年かかりました。ニーズがあると思ったのですが、一向に利用が増えなかったんです。

ある時親御さんにお訊ねをしたらこんなことを言われました。「商店街の人通りがある場所は目立つので、もっと人目の届かないところで預かって欲しい」と。自分の子どもに障がいがあることを隠したがついていたんです。私はそれは断じて

理解できないと何度も議論し、なんとか親御さんたちに許可を頂き、子どもたちを街に連れて行くことを大学院時代に始めました。福祉に見える化したのです。

障がい児支援から共生型支援へ

福祉という仕事はどういう人が担っているのか、これを見える化する必要があったと思いました。見える化したことによって印象的な出来事が二つありました、

一つは障がいのある子どもたちの支援する取り組みがたくさんの方々の目に触れることによって、様々な形の SOS を拾うことができました。最終的には 0 歳の子を持つ親御さんから 96 歳の方を介護しているご家族、不登校の子、生活困窮の方など幅広く SOS をキャッチアップすることができました。

二つ目は、障がいのある子を持つお母さんに「まちで買い物をしていたら知らない方がその子の頭を撫で、"あら久しぶり、大きくなったね"と言われたので、誰だかわかりますか」と聞かれました。私が「それはたぶん商店街の方で、息子さんのことを可愛がってましたからね」と答えると、お母さんは「あら、そう」と嬉しそうにして帰られました。

当時まだ専門職ではありませんでしたが、私たちだけで誰かの暮らしや人生を支えていくのは限界があると感じました。彼らが地域に飛び出し、地域に知られ

ていくことで、彼らが頼れる存在が増えていく。私たちがどんな手を尽くしてもお母さんの気持ちをほぐすことができなかったことを、商店街のおじさんがやってくれたんです。

大学の仲間 4 人で NPO 法人設立、そして社会福祉法人ゆうゆうに

そうした出来事などを通じて、福祉の見える化と、福祉的な支援を地域の人たちと一緒にできる体制づくりが必要だと考えました。そして、大学院修了後、後輩3人とともに勢いで NPO 法人を立ち上げました。それが25歳の時でそれから16年間ここまでやってきました。

その間に NPO 法人を社会福祉法人化して、今は当別町に10ヶ所、隣町に3ヶ所、東京に2ヶ所計15ヶ所、総勢300人の所帯になりました。

ボランティアの拠点 地域福祉ターミナル

ゆうゆうの地域福祉ターミナルは、サポートを受けたい方とその方の困りごとの情報をキャッチアップして、寄り添えるボランティアの方とをコーディネートする拠点です。

特徴的なのは社会福祉協議会のボランティアセンターと学生ボランティアセンターが融合したことです。経験のある年配のボランティアの方と機動力のある若者を融合させることであらゆるニーズに 대응していきます。

今は人口の10%を超えるボランティアの方に登録いただいています。認知症の方、障がいのある方だけではなく、いろんな住民の方々の、制度ではサポートできない狭間のニーズにも対応することを大切にしています。

その人の個性、人生を見極めて マッチングする

ここで私たちが気をつけていることは、個人個人の見立て、つまりアセスメントです。おじいちゃんおばあちゃんは必ずしも子ども好きというわけではないんで

す。子どもにとっても同じです。祖母から虐待を受けて育った子どもだったとしたらとんでもないマッチングになってしまいます。その人が今までの生きてきた経歴や思考など様々なことをしっかりと見極めながらそれぞれをマッチングしていく必要があります。

関係性を持続化させるには

もう一つ大事なことは、持続化です。地域の方々との関係を一過性で作るのは簡単です。例えばイベントを開けばできます。難しいのは、持続化させるために必要な双方にとっての意味づけです。お互いにメリットのある関係性や価値のある取り組みをいかに作るかが大事だと思います。

その人の持っている能力をどう引き出し、どう生かしていくかによって、周りの人たちの捉え方も変わってきます。私たちのしていることは、可能性を追求するクリエイティブな仕事であり、同時にその人の可能性を引き出せず簡単に潰してしまうこともある怖い立場にいることをいつも認識しながら仕事をしています。

地域を巻き込んだ べこべこのはたけ

もうひとつ拠点を紹介します。共生型コミュニティー農園べこべこのはたけという障害者施設です。ここでは利用者の方々が農作物を育てたり、東京で修行を積んだプロの料理長がスタッフとしてレストランを切り盛りしたりしています。最近はお弁当事業もしています。

また、年に数回地域のつながりを再確認したり新たに作ったりするイベントも開催しています。運営は地域の団塊世代の男性の皆さんです。こうした活動に男性の参加が少ないと言われます。そこで、施設の構想段階から建物をどう活用していくのかを考えてもらおうと、こちら側のコンセプトも伝え対話を重ね、地域の方々を巻き込んでいきました。

今では視察に来た人たちに彼らが自慢げに建物を案内したり、イベントの後

はみんなで酒盛りして楽しみ、新しいつながりや役割ができるサードプレイスになっています。元気なうちにつながっていれば、それぞれ困ったことがあっても「お互い様だよ」という関係性が築かれていく。その心地よさが長く続けられる秘訣なのかなと思ったりもします。

制度では応えられないサービスを クリエイティブに考える

ここでは認知症の方にも働いていただいています。これまでずっと農作業をしてきた94歳の方が認知症で畑ができなくなり、デイサービスに行くことになりました。けれどもデイサービスで農業をやるろうとしても介護保険ではできない。そこで他の法人の志のある方々と一緒に考えてここで働いていただくことになりました。制度でできないならどうすればいいかとクリエイティブに考えるのが福祉の仕事の面白さです。

最初お会いした時には杖をついてフラフラして大丈夫かなと心配しましたが、鍬を持ったらシャキッと立つんです。知識と経験はずっと覚えている。ここでまだまだ思い出も作れると思います。

個々の能力を発揮できる仕事分担 共感を生むビジネスに

べこべこの畑では、農業は大事だよねということで思い切って8ヘクタールの耕作放棄地の畑を購入しました。農福連携です。農地を快く譲り受けるためには地域の農家の方々に認めてもらう必要があります。職員が1年間専業農家に出向し、修行して経験を積みました。今は米14トンのほか、かぼちゃやスイートコーン、じゃがいもなどを作っています。後継者に悩んでいた地主さんにも「ご先祖に顔向けができる」と喜んでいただきました。



元気に畑仕事をする
94歳の方

***耕作放棄地** 過去1年以上にわたって作物の栽培が行われておらず、耕作再開の見込みがない土地のこと。

重度障害がある一人の若者には収穫したかぼちゃを磨く仕事をずっとしてもらっています。かぼちゃを磨くことが大好きで、こだわりがある。あるとき知り合いのバイヤーが買い付けに来たときに、「こんなピカピカなかぼちゃは他にない。共感商品になる。」と、手磨きのことを知って感動していました。

さきほど井上先生が共感の話をされましたが、共感を生むビジネスとして彼らにしかできないこともあるんじゃないかなと思いました。

ゆうゆうとしてはどんなことにおいても本人が持つ能力をいかんなく発揮してもらいたいと考えています。

仕事を切り分けシェアしあって一つのものを作り上げていく。その人のできないことではなくて、できることに目を向けてそれぞれをつなぎ合わせれば、素晴らしいものを作れるのではないかな。そんなことが重要であると思っています。

東京大学の学食レストランを オープンし、学生にアピール

こうしてみんなで作った野菜をレストランで加工して、お世話になってるJAを通して東京で売ることになりました。そこで建築家の隈研吾さんと知り合う機会があり、東京大学工学部の記念館をリノベーションして学食兼レストランをオープンするからプロポーザルに参加したらどうかと声をかけていただきました。

今まで人生で福祉にふれる機会が少なかった学生にも、食を通じて福祉や障がいのある人たちの存在に少しでも関心を持ってもらえればという思いがありました。応募したところ運良く採用が決まりました。今年2月にオープンでしたが、コロナの状況もあって運営は大変ですが、せっかくの機会なので、しっかり形にしていきたいと思っています。

テクノロジーの有効活用で 学びを深め、共有化する

上野谷先生のお話の通り、学びはとても大事だと思っています。

私が長野県に伺わずに皆さんこうしてお話できるのは、テクノロジーの有効活用ですね。場所と時間において、情報を得たり学んだりすることの格差がある程度は是正されています。学びの平準化、平等化を進めることができます。コロナの終息後も対面とオンラインのハイブリッドでやるべき事を見極めながら活動ができればいいと思います。

最近の私が力を入れている取り組みは、福祉教育です。大学で非常勤講師をしており、全国の当事者の方や支援者の方々、認知症の方々に対する学びを講義しています。学生に届けたものはYouTubeの登録チャンネルとして当別町の人たちにも見ていただき、学びを共有しています。

同じことを経験し、同じことを学ぶことで世代や立場を超えて対話が生まれます。対話は極めて大事です。

疑似ではないリアルな福祉教育を

また厚生労働省の補助事業として、一昨年から中学校や高校で福祉教育の授業をしています。フューチャー・デザインではないですけど、未来はどうなるのかを一緒に考えたり、障がいのある方や認知症の方、支援者といった当事者の方々にも来てもらい福祉について一緒に考えたりする授業を行っています。

私たちがこだわっている標語は「疑似ではなくてリアル」です。福祉教育の疑似体験はスタンダードかもしれませんが、疑似は疑似でしかない。これは私の経験則で恐縮ですが、「自分があんななくて良かった」「可哀想な人たちだから優しくしよう」といった捉え方だと、そこで価値観が止まってしまいます。リアルのことを伝え、それを超えていくのがこの2年間実践して感じたことです。

最近もある中学生の男の子が、「うちのおじいちゃんが施設に入ってますうなぎごはんを食べている。親に入所できるだけでもありがたいと言われた。大原さんの話を聞いて仕方ないって思いたくなかった。なので僕、料理の勉強しておじ

いちゃんの所へ手作りのお弁当を届けようと思います」と言ってくれたんです。涙が出るほど嬉しくて、一人の福祉人が生まれた瞬間です。彼はどんな専門職よりもそのおじいちゃんを喜ばせる存在です。人材は地域の中にたくさんいるんです。まずは地元で人を育てていくことです。

もう一つ、学校教育に2年関わって子どもたちが本当に苦しい世界で生きているってことを痛感しています。障がいのある人のリアルな話を聞いた高校生は心が解放されるんです。私の母校で授業をしたときも子どもたちがこんなに苦しんでいるのかとびっくりしました。

私たちができるのは多くの子どもたちと現場で向き合うことで、子どもたちがまわりでもっと相談できる人を増やしていかないといけないと思います。

子どもたちはこの国の宝です。宝物は磨いて大切にしていけないといけない。それが今の私の中のライフワークです。



生後7ヶ月の頃に出会った泰地くんは20歳になりました。5、6年前に作った障害者就労のカフェで、彼は憧れのカフェ店員になりました。

福祉のケアはルーティンワークではなく、クリエイティブな仕事ベースにあって、専門性があることを泰地くんはじめ彼らを通じて学ばせてもらいました。この20年間いろんな人たちと伴走しながら泰地くんの人生にも寄り添うことができました。これも国が提唱している伴走支援の一つのあり方なのかなと思っています。

*隈 研吾(くま けんご) 日本の建築家(一級建築士)、デザイナー。隈研吾建築都市設計事務所を主宰。現在、東京大学特別教授・名誉教授。2019年末に完成した「国立競技場(オリンピックスタジアム)」や「サントリー美術館」、県内では「飯山市文化交流館なちゅら」など設計作品多数。

あんしん未来を展望する

上野谷 加代子 氏

同志社大学 名誉教授

井上 信宏 氏

信州大学経法学部 教授

大原 裕介 氏

社会福祉法人ゆうゆう 理事長



参加者が感じている社会的な課題や不安、解決が必要と認識していることをテーマ毎にまとめてテーマセッションを行う

コロナ禍における 住民主体の福祉活動の支援

上野谷 ここからはあんしん未来を展望するにあたって、課題を考えていきたいと思います。事前に参加者の皆さんが今感じている社会的課題や不安についてアンケートをとり、その結果を大きく次のテーマにまとめてみました。

- ①コロナ禍における住民主体の福祉活動の支援
- ②これからの居場所づくり
- ③子どもや女性の貧困、生活困窮者支援
- ④人口減少社会
- ⑤身寄りのない方や親亡き後の社会課題への対応

まずはコロナに対する皆さんの不安が多いので、共通課題として考えていきたいと思います。

コロナ禍は、個別的にも、地域・社会的にも私たちに大きな課題を突きつけています。現場では多くの皆さんが悩みながらやっています。大原さんのところではいかがですか。

大原 私たちも苦労しています。医療に頼れない方々を受け入れているので、数え切れないリスクの中で感染を広げないように、検査をはじめ、医療と違うぬき知識を持って福祉サービスを行っています。

一方で地域でのサロンやさまざまな活動はほとんどできなくなっており、どういったらできるのかを模索する中で、

切り替えているのはアウトリーチのサービス強化です。人的リソースは限られているので、担い手になってくださる方をどうネットワーク化していくかが鍵です。

同時に、コロナ以前からテクノロジーの導入も進めています。Zoomなら北海道の方と沖縄の方とが話し相手になれます。ICT（情報通信技術）を活用しながら、従来の集合型での確認だけではない新たなつながり方を生み出すことが大事なので、知恵を絞ってトライ＆エラーを繰り返しながら実践しています。

井上 大原さんの話を聞いて、悩みや困惑も一緒にこうして皆で共有する必要があると思いました。

皆さんからの課題の中では、子どもたちに対面で接する機会が少なくなるという成長や学びの場のゆらぎは教育に関わる者として心配しています。対面で学ぶ場をどうやって実現できるかはすごく重要ですし、その中で私たち自身も改めて教育とは何かを考えられています。

上野谷 トライ＆エラーの実践とおっしゃっていましたが、失敗を繰り返す中で、「ちょっとこれ、いただき!」という役立ちそうな発見があると思います。その「いただき!」を恐る恐る試しながら、それがうまくいったら共有して次の段階に進む。粘り強くそんな実践をされているのは大切なことです。その中でこの状況

下において福祉活動は住民主体にこだわる必要があるのかどうかです。

井上 住民主体といったときに目の前の主体を考えがちですけど、本当は主体はもっと幅広い概念のはずです。ICT活用で北海道と沖縄が瞬時につながるように、今回のコロナの中では主体を広い見方で捉えられる可能性が見つかった感じがします。

上野谷 「地域でとにかく何か活動を仕切らなければ」という義務感があると重荷になるかもしれないですね。ひとまずそれはちょっと肩から下ろして、例えば、お手紙でのやりとりでもいい。千葉県民生委員児童委員協議会ではお掃除の仕方や家の玄関から1メートルのところまで「元気ですか」などと声がけをする安否確認の仕方など、詳細なガイドラインを作っています。

当事者となる住民主体を、生活者主体という言葉に変えて、生活者として私たちがどう接近できるかを考えた方がいい。それが結果的に住民主体かどうかは、住民が決めることです。だから住民が集まって何かをしなければと義務感にとらわれる必要はないと思います。

井上 「当事者」という考え方は福祉の中で重要なキーワードになってきましたが、その射程はもっと広いと思います。大原さんは地域を巻き込むと同時に巻

*「[新しい生活様式]に即した民生委員・児童委員活動に関するガイドライン」千葉県民生委員児童委員協議会が令和2年10月に発行したコロナ禍における民生委員活動の方向性を示すガイドライン。HP https://chiba-minkyo.or.jp/minsei_info/data22/

き込まれるという形で活動されてきたと言われます。そのように主体の捉え方も広げなければいけないと感じました。

大原 私が常に言っていることは「社会福祉法人ゆうゆうはこの街にとってどんな役割を果たすか」です。それは福祉ばかりでなく、経済もあれば産業もあります。

このコロナで多くの人が困っていて、何かしら皆が生きづらさを抱える当事者になっています。誰もが当事者になったこの社会は、皆が共感できるチャンスです。つまり特定の困った人に何かしてあげることではなく、それぞれ皆が困った中でできることをどうつなげていくかという議論の場を作れるかもしれません。

上野谷 コロナ禍の中、自分たちで考え、自分たちで手立てをしなければいけないことがよく分かったと思います。ショックな出来事がありました。ある方がコロナに感染したと誤解され、町から引越しをせざるを得ない状況を出してしまいました。排除の論理です。地域福祉の実践者としてこれは敗北に近く、初めからやり直そうと、ある委員会で懺悔したことがあります。

大原 コロナに関してゆうゆうで出した方針は二つです。一つ目はオープンにすること、二つ目は広めないことです。感染は当然であるというメッセージを職員や関係者の方々に伝え続けました。

皆の余裕がなくなる社会ではなかなか優しくなれないことに気づいてきた。だから感染した人を SNS であげつらって人格否定にまで発展してしまう。上野谷先生のお話の通り、優しさを信じて福祉をやってきた私たちもこの現実受け止める必要があります。それを逆手にとって折れそうな心を立て直していくことが、福祉の実践を続けてきた私たちの使命なのかなと思っています。

井上 社会の立て直しの軸のひとつは福祉です。しかし、福祉には多様性と‘ONE NAGANO’と表現されるような一様性の両側面があります。多様性には排除の論理があり、コロナ禍は、自分

の考えと相容れない人とどうやって共生できるかという問題を可視化しました。感染が拡大する中で、一つになれる時にどう隣人として共にいられるかを考える大切なテーマを福祉側が学んだのではないかと感じています。

これからの居場所づくりを どうするか

上野谷 次に参加者から「公民館は社会教育の機関として何ができるか」「コロナで地域のつながりの希薄化が進む中、どのような呼びかけをすればいいのか」といった課題をいただいています。これからの地域づくり、居場所づくりについてはどんなヒントがありますか。

井上 感染予防の緊急事態宣言下で居場所づくりを積極的に進めるかどうかは、文字通り多様な意見が出てくるところです。このコロナ禍の中で何が正解なのか判断できる人はいないと思います。正答がないことを出発点にしてこの状況と向き合っていく必要があると感じています。

大原 居場所には心地良さがとても大事です。これまで、サロン活動に來たくな いけど無理して来ていた人がもしかしたらいるかもしれない。この機会にみんなが集まることで何がそこにもたらされていたか、居場所はなぜ必要だったのかを検証する必要があると思います。つながり方は一つだけではないという問いから始めてもいいのではないのでしょうか。

上野谷 居場所の概念はいろいろありますが、そこが押し付けがましかったり、出番や役割がなかったりすると居場所にはならないのではないのでしょうか。

井上 そこは今回のコロナの影響で分かったポイントだと思います。実は皆がおせっかいする場所がなくなって困っている感じがします。

大原 そこに來る方々の思いよりも、居場所づくりをする側の不全感のほうが声として大きくなっていないかということ

ですね。自分の生きがいややりがいになっちゃった。居場所づくりによって何がそこにもたらされるのかをきちんと整理する必要があります。

小学生になる私の息子は幼稚園の時から張り切って行く時と行かない時がありました。どうしてなのかと思ったら出番と役割がある日は張り切って行くことがわかりました。先生方がおっしゃるように、居場所は來る人たちの出番と役割をいかに作れるかが大切ではないかと思っています。



居場所の役割を 個々に見つめ直す機会

上野谷 「あんた私のなんなのよ」ということを明確にするということですね。そういう状況がないと居場所に行っても面白くないですからね。

一方で、障がいのある子や生活困窮など様々な課題を抱えている方々にとっては安心できる場がなくなっちゃったしんどさがあるかと思っています。そうした方々のケアも含めて、居場所を利用してきた方々を一人一人もっと丁寧に見つめ直す良い機会ではないのでしょうか。

井上 長野県は自治公民館が多い地域ですが、眠ってる公民館も多い。場所はあるけれどどう活用するか、ソフト面を考えなければいけない。居場所や役割についてはまだまだ長野は伸びしろがあるのかもしれない。

上野谷 魂を入れ込むということですね。そのために住民まかせではなく、ソーシャルワーカーの力が必要だと私は思います。

貧困の問題

上野谷 次に貧困、生活困窮の問題です。この課題は難しい。引きこもり、身寄りのない方の親亡きあとのことなども含め、貧困はすべての課題の根源的なものですから。

井上 貧困というまずお金のことを考えますが、例えば教育の機会や福祉サービスへのアクセシビリティ（近づきやすさやアクセスのしやすさ）の弱さも貧困の裏に隠れています。マクロの視点で一度整理をする必要があると思います。

上野谷 人間の基本的なニーズが満たされない状況が貧困だと言われます。^{*}岡村理論でいうと、経済、健康、学習、文化娯楽、就労、家族の中での安定感、安全も含めた人としての基本的なニーズです。だから貧困になるとすべてが崩れてしまう。

大原 私たちも生活困窮者自立支援事業を行っていますが、おっしゃる通りこれはもう多角的な問題です。かなり複合化、複雑化しています。現時点での仕組みや支援だけでは立ち行かない。このピンチをどう乗り切るかはこれまでの縦割りのケース会議ではなくて、皆を巻き込んだ議論が必要です。チームをつくってこの人をどう支援するかを本気で考える。もう一度原点に立ち返るべきではないかと思っています。

上野谷 貧困自体を考えるのは経済学で、社会福祉は貧困者、人をどう支援するかです。暮らし人の生活、就労、家族関係といった課題を解決するためにはいろんな支援がまだまだ残っています。どんな小さなことでもいいのです。「おはよう」「お元気ですか？」と声をかけるだけでもいいのです。

SOS が出せない社会

井上 現在の貧困は、容易に見えないことが問題の一つです。大原さんのお話のように「自分の子どもが施設に行っていることがわからないようにしてくれ」ということとつながっています。そこに貧困を考えるキーがあると思います。今

自分が住んでいる地域の中にどんな貧困の問題があるのか、私たちは事実を知らなければいけない。知ることで始めて私たちは貧困の問題に共感し、どうするかを我がこととして考えることができる。



大原 井上先生がおっしゃられたことはすごく大事です。貧困家庭の子どもは自分がそう思われたくないからそれを隠すわけです。認知症になっても隠すし、障がいがあることも隠す。これをオープンにするのはなかなか難しいことです。

今は申請制です。困っていると言ってもくれたら私たちも手を差し伸べられるけれど、SOS が出せない社会になっている。SOS を出せる地域づくりが必要です。SOS を声に出したら応えてくれる人がいて、そのことで元気に生きていける。決して卑下する必要はない。そんなリアルなメッセージを子どもの頃から伝えていくような地道な積み重ねが大事ではないかと教育の現場に行くと強く感じます。

井上 生活困窮者支援も含めた数多くの支援事例は、専門職のものではなくて地域のもので。個別ケース会議は専門職が中心になるけれども、支援事例を地域に開いていく活動が重要だと考えています。私は地域包括支援センターと協力をしながらできるだけそうした情報を地域にフィードバックし、住民の皆さんと共に考える機会を作るように働きかけています。

上野谷 30年ぐらい前には私のまわりでも、台所のお醤油みたいにちょっとしたものでしたらお隣に借りに行っていた。これは一つの文化です。困った時はお互い様ですから、借りに行ってもい

い、そうしてもいいんだというロールモデルをつくったらどうでしょうか。SOS を出してもいい、弱くてもいいんだと言える自由です。そしてSOSを出していたら上手に助け、助けられた側も一言「ありがとう」と言えばいい。お互い作法がありますからね。

井上 “作法”は私の研究の重要なキーワードです。社会福祉、社会保障の課題を地域で解決するポイントは、社会関係とそこで交わされるコミュニケーションです。私たちがつくりあげてきた「暮らしの作法」の中に今の貧困の問題を解決できるヒントが山ほどあると考えています。

上野谷 互助の意味でも自治会の活動は大切です。都会でも町会に入るマンションは多い。大阪市ではマンションを建てるときは町会に入ることを前提にしています。長野県はどうでしょう？

井上 町会に入らないマンションもたくさんあるようです。松本市の包括や社協の担当者にとってそれをどうしたらいいのか課題になっています。

バズりを気にする社会からの脱却を

上野谷 つながりの希薄化、孤立、引きこもりに関連して、インターネットやスマホの普及によりコミュニケーションのモデルが変わろうとしています。スマホ依存への不安も課題に挙がっています。



井上 私が強く言いたいのは^{*}「バズることを求めるのはやめませんか」ということです。バズるというのは数の論理。自分が声高に語ったことがどれだけ人にインパクトを与えたかを確認するためのもので、多くの人がその中で病んでいっている。フューチャー・デザインで考えたい未来の社会は、バズりから自由になって

^{*}岡村理論 社会福祉学者岡村重夫が提唱した理論。すべての個人が社会人として生活してゆく場合に避けることのできない要求を「社会生活の基本的要求」として①経済的安定の要求 ②職業的安定の要求 ③家庭的安定の要求 ④保健・医療の保障の要求 ⑤教育の保障の要求 ⑥社会参加ないし社会的協同の機会の要求 ⑦文化・娯楽の機会の要求の7つに整理した。

^{*}バズる ある事柄（言葉や物、人など）が、主にSNSなどのインターネット上で話題になり多くの人の注目を得ること。

いる社会です。

先の提言で未来人になれるのは高齢者ではないかと言いました。証明されていませんが、現在20歳の人は、50年後の未来に70歳になっている自分を想像できてしまうからではないかと考えています。しかし、現在70歳の人が50年後の未来に意識を向けると、自分のことより子どもや孫のことが想起されるみたいです。だから現在の軛から自由になって、未来を考えることができるようになる。現在からつながる軛をいったん断ち切ることによって、初めて斜め上から私たちの取り組みを冷静に眺める視座を手にすることができるのです。

そうした未来から現在を見ると、承認欲求のもとで誰かわからない人から数多くの「いいね」をもらうことを考えてバズることを求める世界は、未来にはないよと言われている感じがするのです。バズることを求める社会が貧しい社会ではないかということです。

スマホ依存も承認欲求です。承認欲求を横に置くことができる社会にどうしたらできるのか、フューチャー・デザインのテーマの一つかもしれません。

大原 バズりを気にする社会からの脱却、本当にそう思います。バズらないと不安だから結局そこに対して依存し、世間のトレンドもバズりに合わせたものになるので、文化が育まれない。子どもたちもそうです。自分が認められていない、そこに加えられていないという自分が他者から外れる不安が結局彼らの生きづらさの根底にあるのではないかと私は思っています。

未来への夢や希望を創るために 今、私たちは何をすべきか

上野谷 歳を重ねてくると俯瞰ができるようになっていろんなものが見えてきます。それに欲がなくなってくるんですね。すると50年先、100年先の未来を考える時に、もう無駄はやめてピュアなことだけを残したらいいかということです。気持ちになります。

安心できる未来を考え、地域福祉計画をつくるなら80歳以上の人たちだけで作ってみるのもいいかもしれません。自分が愛したこのまちを良くしたい、どうすればひ孫世代の社会が良くなるのかと考えることができますから。

環境問題への関心も同じです。この子らのためにも環境をこれ以上悪くしてはいけなと。私も環境活動をしている人とも手を組んで応援しています。

井上 そうした視点で見ると、私たちは今何を伝えなければいけないか、そのために何をしなければいけないかが変わってきます。それが未来を考える大切な視点です。

上野谷 福祉人として未来への夢や希望を作っていきたいですね。ソーシャルワーカーは人々の暮らしに近くてわかりやすい位置にいますから、消費者でなくクリエイティブな創造者になってもらいたいと思います。

最後にお二人から長野の皆さんへのエールをいただきたいと思います。

新しい社会、 あんしん未来の創造に向けて

大原 私は4、5年ほど前からある方からの依頼で、タイの小さな村へ日本の福祉や介護を参考にしてもらおうと通っています。道路も舗装されておらず、テレビやコンビニもない村には、昔の日本のような光景があって、なんとなく居心地が良かったんです。こちらは支援のつもりで訪ねているのに、住民の方々は貧しくても楽しく生きている姿にたくさんの学びがありました。経済的に豊かになっていくことは心の豊かさや安心を失うことなのかを問い続け、福祉人として地道な実践を続けていきたいと思います。

コロナ禍は新しい社会の定義を福祉という切り口で考えることができる機会と捉え、今回も長野県のさまざまな取り組みを学ばせていただきながら私たちの



町にも取り入れていきたいと思ってます。

井上 社会政策を学び始めたころは「国家政策」が重要だと思っていました。しかし社会を変えるには、ふつうの暮らしを無視することはできない。私たちが、生活の最前線で少しずつ行動を変えていくことが大切なのではないでしょうか。

将来世代のために新しい社会システムを作ることが重要なのは明確です。そのために何が必要かという、目の前にあるプランAという既定路線のほかに、プランBという選択肢があるのではないかと考えることです。

これまで私たちは間違いなく社会を豊かにするためのプランAを選択し続けてきました。これからは、プランBをとってみるという小さな選択を積み重ねることが、50年後100年後の未来を大きく変えるのではないかと考えます。

プランAと共にプランBを考え、そのプランBをどうしたら実現できるかを考えることが大切であると、今日の議論を通して自分の中でも明らかになりました。

信州ふっころプランにもぜひ未来人の視点を加えてプランBを考えてみるのも一案ではないかと思っています。

上野谷 あんしん未来を展望してきましたが、このコロナ禍は大きな転機となりそうです。

私たちはどんなときも、専門職である前に一人の魅力ある人間になる努力を続けていきたい。それをしながらあんしん未来をつくるためにもそれぞれの皆さんが、やれることをぼちぼちやりながら、そして楽しみながら、静かなチャレンジを続けていただきたいと願っています。

本日はありがとうございました。

長野県あんしん未来創造センターの設置にむけて

社会的要因による様々な不安に対してあらゆる組織や専門職、住民などと協働しながら新たな「あんしん」の創造を目指します。

経済格差、非正規雇用、晩婚、少子、人口減少、地域の過疎、家族関係の希薄、世帯の単身、高齢と長寿、孤独と孤立など、これらは私たちを取り巻く今の社会の状況です。「食」や「職」、そして「住」などの個の生活が不安定になり、既存の社会保障の仕組みだけでは、一人の人、一つの世帯の生活を支え切れない状況が散見されるようになりました。そして、重なり合う生活課題を抱えても、支援につながらない、ニーズに対応したサービスがないなど、制度の狭間において社会的孤立や生活困窮の問題が広がっています。

本県においては、このような社会の不安やそれぞれの人の「生きづらさ」に寄り添い、社会保障や公的な支援・サービスだけでは解決できない課題に正面から立ち向かい、あらゆる住民や組織や専門職の気づきと知恵と行動による協力をいただきながら、「あんしん」の創造に取り組んできています。

人と人をつなぎ、人と資源をつなぎ、資源と資源を組み合わせ、無い資源を創り出し、地域のポテンシャルを引き出しながら、提供できる者が提供できるものを提供し合うサポーターシップな実践の展開と、分野や立場を越えてみんながつながり、一人の個人が生き生きと地域のなかで暮らせるような仕組みを長野県内につくっていくためのプラットフォーム、それが「長野県あんしん未来創造センター」です。

長野県あんしん未来創造センター構想図

